

若竹

第四十七号

[奉祝 悠仁親王殿下御誕生]
お健やかなご成長をお祈り申し上げます



新年研修会『歴代会長座談会』収録号

愛媛県神道青年会

新 事務局 〒790-0934 松山市居相2丁目2番1号
伊豫豆比古命神社 社務所内
TEL 089-956-0321 FAX 089-956-3323

ホームページアドレス <http://www.ehimeshinsei.net/>

卷頭言

愛媛県神道青年会

会長 和氣省一



本会は、今年で再発足いたしまして三十五年という節目の年となりました。こうして今日を迎えることができたのは、偏に、先輩諸賢の熱誠あふれるご支援と、私たちの微志を善しとして県内各神社宮司皆様のご協力の賜物であり、衷心より厚く御礼申し上げます。

また、再発足以来、歴代会長十代を

重ね、現在十一代目会長として二期四年に亘り会長職を担つてまいりましたが、先般開催されました臨時総会におきまして、次期会長が新たに承認され、新年度より新たな体制により歩を刻むこととなりました。この四年間に支えていただいた本会役員、会員の皆様には重ねて御礼申し上げます。

さて、昨今、家族内での陰惨な事件が相次いで発生しております。思うに、立派な「家」はあるが「家庭」がなく、すべてが分断され、先祖の意味も、親子、家族の意味もまったく無価値なバラバラの個人が家族の仮面を被つて殺伐とした生活を営むという現代日本の家族の危機的病巣が引き起こしたものであり、家庭内でそれぞれが気ままに生きることが尊重されてよろこばれ、そこではその喜びが他人の迷惑になります。

最後に、今後変わらずの先輩諸賢のご意見、ご共同をお願い申し上げます。

はないのでしょうか。本来、家族というものには、そこはかとない絆があり、口には出さぬが確かな信頼があり、ほどよい甘え、喧嘩もあって、いざというときには団結して事に当たる、これが家族というものではないのでしょうか。

家族団欒の「団」は円形に集まつた人、「欒」はもつれて絡み合うとか

人の集まりの和やかなさまという意味があります。「家」が器とすれば

「団欒」が中身であり、今後の当会も活き活きとした団欒のある会員を育てるこそこそ、器である愛媛県神道青年会が、まさしく更に「うだつ」を上げる第一歩であると信じます。

ホームページアドレス <http://www.ehimeshinsei.net/>
- 2 -

神道青年四国地区協議会

第十二回定例総会

並 研修会報告

去る、平成十八年八月二一日・三日に香川県高松市ホテルニュー フロンティアにて神道青年四国地区協議会第十二回定例総会並びに研修会が行われました。当会より、和気会長を始め七名の会員が参加致しました。初日は高松市一宮町に御鎮座されます田村神社にて正式参拝、その後ホテルニューフロンティアに場所を移し、定例総会が開催されました。今回の研修のテーマが「日本の言葉」へ継承すべき日本語の豊かさとして、先ず基調講演を「歴史的仮名」を楽しまうと題して、神社新報社の編集次長、編集長を歴任さ

れ、現在貴船神社宮司でおられる高井和大先生より、今に至るまで神社新報社発刊の神社新報が創刊以来「歴史的仮名遣ひ」を守り続けている理由、後半は、歴史的仮名遣ひの修得方法を分り易く説明並びに指導を戴きました。その後、同ホテルにて懇親会を行い、ご来賓を始め、四国四県の会員の親睦を深めました。二日目は、「変わりゆく日本語」と題し、高松大学生涯学習教育センター長、四国新聞常務などを勤められる、津森明先生により、祖先から伝えられてきた歴史、伝統文化そして「日本語」を古典から学び、日本語を理解し、次世代へ継承していく大切さを講演戴きました。この研修会を通じ日本人は言葉を非常に大切にし、かつて日本は「言霊の幸ふ國」といわれてきました。その点から見ても我々神職は言葉といううものに敏感に、慎重に取り組み先人の

心を学んでいきたいと思います。
最後に研修会を担当して頂いた香川県神道青年会の皆様に御礼を申し上げ、来年は愛媛県が担当県に当たりますので開催にあたり一員として少しでもお手伝いできればと思います。

△ 渡邊 平 △



京都府神道青年会

創立五十五周年記念事業

平成十八年八月十日・十一日

石鎚神社正式参拝
石鎚山登拝練成会

京都府神道青年会

会長 中野 忠雄 殿 他十四名
愛媛県神道青年会 会長 和気 省一 他三名

八月初旬、京都府神道青年会の精銳十五名が、創立五十五周年の記念事業の一つである靈峰登拝記念練成会の開催の為、愛媛県の石鎚山に参集致しました。

今回の練成会は、石鎚信仰の原点である成就社を経由する表参道での登拝、石鎚神社の最大の祭であります夏山開

き大祭時、御神像が通られる参道（3.6km）を歩き頂上社を目指す事となりました。

当日、京都府神道青年会の皆様は早朝より京都を出発、バスにて四国路へ、石鎚山登山口のロープーウエイ下谷駅にて、愛媛県神道青年会の会員と合流、石鎚神社職員でもあり今回の先達役を務めさせていただきました。愛媛県神道青年会会長 和気省一も社務の都合の為、若干の遅れで成就社にて合流、十九名の精銳？が成就社にて登拝安全の清祓いを受け、いざ入山。

ほとんどの会員が始めての石鎚山の為、緊張の面持ちで出発、大自然の清々しい空氣に囲まれ、石鎚山の掛声の「ナンマイダ！」を皆で復唱し、励ましあつての登拝となりました。表参道の中間には「前社が森」という切り立った山があり、そこには石鎚名物の鎖があります。その鎖を無事に通れば、この先の一、二、三の鎖も大丈夫という「試しの鎖」に体力

と高所に自身のある約半数の会員が挑戦、ほら貝の音にも励まされ無事に通過。途中、他の登拝者とすれ違う時は、石鎚山の挨拶言葉で、下山者には「おぐだりさん」、登山者には「おのほりさん」と声を掛け合いながら登つていきました。このような挨拶も、最近では少なくなっているようですが、一昔では当たり前の挨拶だったように思います。

いよいよ頂上目前の鎖場に差しかかり、一同気合を入れなおし、先ずは一の鎖（三十三メートル）を全員がかけました。雲行きがやや怪しくなる中、自信のある方は一の鎖を、自信のない方は迂回路のふたてに別れ進みました。二の鎖は六十五メートルあり傾斜も時には直角に近く、正に修行。鎖をかける会員の表情は真剣で、神様のご守護と自分の体力を信じ一歩ずつ確実に手足を進めました。三の鎖（六十八メートル）を目前に少量の雨が降ってきた

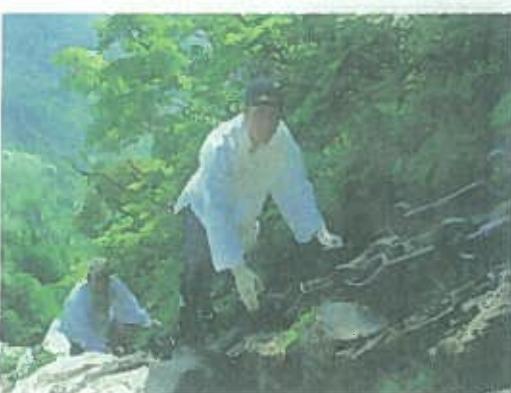
と思った瞬間、突然大粒の雨に、山の天気は変わりやすいのですが、バケツかタライをひっくり返したような雨、遠くに雷の音も聞こえ、会員全員がやむなく鎖をあきらめ迂回路を通り頂上社へ到着いたしました。

全員びしょ濡れの服を頂上山荘にて着替え、頂上社夕拝に参列、無事の登拝を感謝申し上げました。夕拝終了頃には雨もやみ、綺麗な夕日を眺め、大自然の力、美しさを感じ清々しい心をいただきました。

日没後は、時に夜景を愛でながら、道中を共に出来た喜びもあり、和やかに親睦を深めることが出来ました。

翌朝すばらしいご来光を拝し、瞬き

するごとに変わる雲海を見ることが出来ました。朝拝神事に参列後、石鎚神社の特殊神事である御神像拝戴神事（御神像を直接ふれる神事）を受け、神様の力を戴き、その後会員の勇士が



石鎚名物「鎖場」に挑戦



京都府神青の皆様 お疲れ様でした

第三回野外体験親睦会 高知県柏島 キャンプ＆海水浴 報告

平成十八年八月二十三日二十四日、第三回野外体験親睦会が開催されました。今年ではや三回目を迎えた愛媛県神道青年会の恒例行事となりつつある夏の親睦会です。過去二回、四万十川でのラフティングを日程に開催されましたが、今年はもっと気軽に家族で参加できる企画を検討の結果、和気会長の「今年は海に行きましょう」の鶴の一聲で、四国西南端、高知県は大月町柏島にてキャンプ並海水浴を行つて参りました。宇和海の豊後水道と太平洋がぶつかる海域で、スキューバダイビングのメッカであり、豊富な魚種とサンゴ礁、何よりも水が綺麗との情報にてこの地が選ばれました。

当日、日本晴れの下、心晴れ晴れと出発し、参加者と合流、買出しをしながら一路柏島に向います。しかし宿毛の山添いではにわか雨に降られ雷まで鳴り出しキャンプが案じられましたが、大月町に入ると天気が回復に向いほつとさせられました。そして夕刻、大人十一名、子供九名の参加者が柏島工ヨーキャンプ場に到着。早速、宴の準備に取りかかりました。男性はタープや机の組み立て、そしてバーベキューの火を起こす役、女性は食材の調理をする役。子供達は両方のお手伝い。蜩の鳴く夏の夕暮れの中、参加者全員生き生き輝いていました。私は汗と涙と煙にまみれつつ、何とかバーベキューコンロに火を起こすと女性陣がてきぱきと食材をさばいている調理場に向かいました。そこで会長から頂いた五キ

ロの牛肉塊を目にします。そしてその肉塊を前に私の妻が遠方に暮れて立ちつくしておりましたので、私はつい「俺が切ろうか?」と言ってしまいました。もちろん妻の「大丈夫、あっちでビールでも飲んで」という答えを期待してです。ところが妻から返ってきたのは、満面の笑みと「よろしく」という答えでした。そして不幸にも巨大な牛肉との格闘が始まったのです。しかし、幸いにも私の手元には小野部会長から借り受けた、良く手入れされた包丁セットがあり、それを使わせて頂き迅速、生半可な知識とガソツで肉を何枚か切り取り、その後、焼き肉屋で食べた肉の形を思い出しつつバーベキュー用に切ります。小さく切った肉からは、先ほどまでの圧倒的な肉塊の存在感は無くなり、不器用な男に切り刻まれたちっぽけな肉の悲哀が感じられ、また背後からは妻の冷たい視線を感じ取られましたが、私は満足でした。兎に角これでバーベキューが出来るのです。そこでふとバーベキュー用の肉の片隅に据えられた脂身の存在に気づきました。もちろん鉄板にく油用に使うつもりで切り分けたのですが、それにしては量が多くすぎるような気がします。まあいいか、と私はその大量の脂身をボールに入れ、他の食材と共にバーベキューコンロへと運びました。後で起ころる悲劇の引き金になるとも知らず。そして後ほど私は身をもって自分の浅はかさを睨うことになるのでした。食した方の記憶を再び呼び覚ます事を憚り、ここに書き記すことは控えさせていただきますが、私は今でもあの「脂焼きそば」を見つめる会長の冷めた視線と、笑いながら焼きそばを食いつつも目は笑っていない小野部会長の顔を忘れることが出来ません。でも一口目だけはみんな「美味しい!」って言つてたんですよ一口目は。これで一つ良い思い出が出来ました。



子供達はずっと泳ぎっぱなしでした



みんなで協力みんなでバーベキュー

そして宴の後、一宮理事の息子さんと野原に寝転がり、小一時間程一人で流れ星を探して夜空を眺めた後パンガローへ向い、心地よい泥酔と共に眠りへと落ちていきました。

飲み過ぎとはしやぎすぎの効果で非常に気持ちの良い睡眠を貪る私でしたが、夜中に何度も、大きな生き物が部屋を出入りする物音で目が覚めました。何だろう?と、気にはなったのですがあまりの眠気に状況を確認できるまで瞼が開かず、また深い眠りへと落ちていく中でその生き物は最後に「暑い・」と一語漏らし部屋を出て行くとそれっきり帰つてしまふでした。そして、朝目覚めると会長の姿は見えず、何故か一宮理事が床で寝ておられました。なんでも、私に割り振られていたパンガロは、一つ隣の棟だったようで、私が寝ていた寝床は一宮理事の寝床だったそうです。そして夜中に部屋を出入りしていた大きな生き物の正体は、エアコンの無いパンガローの暑さと、一宮理事のイビキの騒音とに格闘する会長のお姿だったのでした。

さて、翌朝、外に出てみると清々しい自然の木々の香りが漂います。なんだか、本当に小学生の頃の夏休みが思い出され、ふと空を見上げると今日も良い天気です。本日予定の海水浴へと期待を膨らませました。

その後、朝食をとり、掃除を済ませ、キャンプ場を後にしました。車で十分程走ると、遠くに小さな島と、海の中を真っ直ぐ島へとつながる橋、そして青空と水平線に浮かぶ白い雲、それからギラギラ輝く夏の太陽が照り映える蒼い海という、一つ一つの要素が見事に調和された素晴らしい光景が目に飛び込んできました。今日の目的地、柏島海水浴場の遠景です。

海水浴場の駐車場に車を停めると、午前中であり

ながらもすでにきつい日差しと暑さを顔で感じ、すぐにも海に飛び込みたい気分になりました。まず子供達が海へと飛び込むのを見届けてから、はやる気持ちを抑え平静を装いゆっくりと海へ向かいます。思えば海水浴は何年ぶりだろうと思しながら足を入れ、水の冷たさに慣らす為膝の上まで浸かり立ちつくしておりますと、背中に殺氣を感じます。まさかと思い振り返ると、そこには、今、正に私の背中に向けて冷水を浴びせ掛けようとしている妻の笑顔がありました……「冷たい!」

さて、久しぶりの海水浴です。水はとても綺麗で、少し潜れば熱帯魚がたくさん泳いでいます。子供も大人も皆大はしやぎです。やはり夏の日差しの下には笑顔が似合います。そんな中、海水の透明度が高い海で泳げただけでもこの柏島に来た甲斐があったと思いました。もう最高の気分でした。

そんなこんなであつという間に時間も過ぎ去り、解散の時間が近づきました。準備の時とは逆に徐々に盛り下がっていく気持ちの中、片づけを済ませ荷物を車に積み込みました。そしていよいよ解散です。心地よい疲れを引きずりつつ皆家路へと向かい車のハンドルを握りました。そして今年の野外体験親睦会も無事、幕を閉じました。

神道的な研修ではありませんが、懇親を深める意味では大いに意義のある行事だったと思います。特に大自然の中では皆さんの普段と違う一面が見られ、また一つ親近感が湧くような気がします。ご参加いただいた皆様ありがとうございました。そしてお疲れ様でした。また何処かの大自然の中でお会いしましょう。

▲ 阿部茂之 ▲



平成十八年度
観月神楽の夕べ

高忍日壳神社

去る九月八日、伊予郡松前町鎮座、高忍日壳神社（後藤正宣宮司様）に於きまして、恒例の観月神楽の夕べが開催されました。会長始め青年会会員、県内の先輩神職の方々、また巫女舞は伊豫豆比古命神社の巫女四名、総勢二十有余名によりご奉仕させて頂きました。当日は演奏に先立ち、会長以下奉仕者が当神社大前で正式参拝、当夜の演奏の無事成功を願いました。

夕日がまだ沈みきらない午後六時半より奉納を始め、「浦安の舞」、「管絃越殿楽」、「陪臤」、「悠久の舞」、伊予神楽の「神躰細女之舞」、「弓の舞」、「大蛇の舞」を奉演致しました。始めたばかりの頃は空席が目立ちましたが、演目が進むにつれ、満席になり、最後の御神楽では立ち見の方で境内がいっぱい

になりました。本年は会長自らマイクを持ち、流暢で機軽のきいた司会進行を致しました。雅楽や御神楽を初めて見た人も多く、会長のわかりやすい説明にうなづいている方が少なくありませんでした。また、最後の御神楽で鬼と相撲をする場面で、子供たちが恥ずかしがつてなかなか前に出なかつた時、鬼が「リンゴをあげるから相撲をしないか?」といった所作をとつた時には、会場は笑いの渦に包まれました。

御力添えを賜りました後藤宮司様始め当神社氏子総代様、又ご準備頂いた皆様に深く感謝を申し上げる次第でございます。九月に入り、雨が多い日が続いていただけに、当日の天候が心配でしたが、雨に降られることなく、無事滞りなく終えることが出来ました。最後に奉仕者一同総出で御礼の御挨拶を申し上げている時に、雲の中からうつすらとお月様が見えたのが強く印象に残っています。



大蛇の舞



悠久の舞

**神道青年四国地区協議会
第九回神道行法鍊成会**

去る平成十八年九月十九日に、徳島県青年神職会担当にて、四国の中央に在ります徳島県三好郡池田町は三所神社に於いて「神道青年四国地区協議会第九回神道行法鍊成会」が執り行われました。当会からは、長曾我部副会长を始め四名の会員が参加致しました。前日の台風の影響もあり、昨年度に引き続き延期かと心配致しましたが、当日は晴天に恵まれての開催となりました。白衣・白袴に着替え、三所神社に於いて内田宮司さんにより正式参拝を執り行って頂き、徳島県神社庁金倉庁長御列席の下開講式を行った後、道彦の建島先生・助彦の永本先生により鎮魂法の御講義を賜りました。参加者皆真剣に鎮魂を行い、汗の滲む程でした。休憩を挟んで神社近くの祖谷川に於いて禊ぎを行いました。台風の去った後で、浅瀬でないと流される程の水量でしたが、どうにか入水し禊行を行う事ができました。後、三所神社に於いて閉講式を行い、本年度の禊ぎ鍊成

会は終了致しました。禊祓行の鳥船行事の中で和歌を唱和致しますが、此の三首の和歌も敬神生活の綱領と同様に神明奉仕する中に在つて、大切な心懸けを謳つた和歌であると思います。これらの言葉をいつも念頭に置いてご奉仕しなくてはならないと、改めて気付かせて頂く良い機会となりました。この鍊成会を担当して頂きました徳島県青年神職会の皆様、大変お世話になりました、ありがとうございました。紙面をお借りして御礼を申し上げ、鍊成会のご報告とさせて頂きます。

▲ 田内 逸知 ▼

**神道青年全国協議会
夏期セミナー 報告**

夏期セミナーでは日本における皇室の存在の意義について國學院大学にて、著名な先生方の講演を拝聴する機会を得た。中でも興味深かつたのは、諸外国の君主と我が国における皇室の違いである。たとえば、現チャールズ皇太子のバッジには「ICH^{イッヒ} DIEN^{ディーン}」(我奉仕す)とあり、なぜ英國王室なのにドイツ語かというと、現ウインザー朝はドイツ貴族が源流だからだそうだ。なんと皇室と異なることであろう。エリザ

ベス女王を引き合いに出し女系天皇容認の根拠となす乱暴さに驚きを禁じえなかつた。また、日中韓での儒教における徳目の優先順位の差も興味深い内容であった。忠と孝は往々にして離れて来るものである。我が国では忠が重んじられている。一方中韓では孝が重視される。我が国では建国より断絶なく皇室を頂いている王道の世界であるが、大陸では王朝が断絶する革命が何度も起り、時の権力者が武力や権謀をもつて支配・統治する所謂霸道の世界であり、この差異が先述のように社会における価値観の違いを形成したという分析であった。この他にも、アメリカ(エダヤ資本)からの日本への圧力など、広く世界情勢を俯瞰する多岐にわたる内容であった。セミナーを通じて、知識不足と視野の狭さを痛感し、今後の学習課題を得ることができ、また、皇室のご存在の意義を十分すぎるほど再確認できる非常に有意義な時間を過ごすことができた。斯も貴重な席に参加させていただき大変ありがとうございました。末筆ながら、当該セミナー開催くださつた諸先生を始め関係各位に深謝申し上げて、セミナーの感想とさせていただきたい。▲ 重松 修 ▼

第三十六回

三島由紀夫・森田必勝
両烈士慰靈祭斎行報告

平成十八年十一月二十五日、今年も三島森田両烈士慰靈祭が斎行された。この両烈士の挙行や言葉が時代を超えて、色褪せることなく私たちに語りかけてくる。

「日本は、経済的繁栄に現を抜かして、ついには精神的に空っぽに陥つて、政治はただ謀略・欺徳心だけ・それは日本の根本が歪んでいるんだ。それを誰も気がつかないんじゃない。」

日本の根源の歪みを気がつかない。

歪んでいる。確かに、戦後からの日本は今に至るまで歪んでいる。今日のいじめ自殺問題に始まる教育に関する事件。



無氣力で働く若者の増加。ゲーム感覚で私腹のためだけにお金儲けをする社会的理念の欠落した企業の台頭。子供を虐待し死に至らしめる母親たち。数々の不祥事が発覚したにもかかわらず偏向的報道を続ける国営放送を中心とした偏狭的マスメディア。大東亜戦争の敗北から続いてきたアメリカの思想的侵略により日本人の精神や価値観は朽ち果てようとしている。いや朽ち果ててしまつているのか知らない。覚醒しなければ。古からの記憶を伝い乍ら。眞の日本人として。
▼ 小野哲也 ▼



**神道青年四国地区協議会
親睦ボウリング大会
イン松山 報告**

平成十八年十二月五日、午後四時から松山市のF A S T ボウルに於いて、神道青年四国地区協議会 親睦ボウリング大会が行われました。参加者は、徳島県五名・香川県二名・高知県五名、そして当番県の愛媛県十三名で二ゲームを行い、一・二ゲームのトータルスコアで個人成績を競い、二ゲーム目の上位二名のトータルスコアで各県対抗の会長杯（石製のボウリングの球）を競いました。役員会に引き続き行つた為、数名がステッソで、ほとんどの人が私服に着替えての参加であつた為、誰から見ても神職がボウリングをしているとは思わなかつたと思ひます。ゲームは七つのレーンに各県全員を組み合わせスタートしましたが、黙々とハイスク

アを狙つて投げているチームや、和やかに照れ笑いでハイタッチを交わすチームが有り、様々でした。自分たちのチームや他のチームを見ながら全体的に和やかな雰囲気で進んで行きました。私は、同じチームの吉川君が「フォームが悪い」と自身で何回もフォームの確認をしていた姿が一番印象に残りました。スコアはほぼ一〇〇前後で、みなさん一〇〇超えれば良しという感じでしたが、上位数名は一七〇、一八〇とハイスコアを並べ、ゲームも終盤にさしかかると、当番県である愛媛県会員が上位を占めている事に気付いた愛媛県の和氣会長から、上位の者へ無言のプレッシャーが与えられましたが、それに怯む事無く愛媛県の眞鍋監事は三連続ストライクでターキーを達成し、見事、ダントツで個人戦優勝を果たしました。終わつてみると、各県対抗の成績で比べてみても、会長杯も愛媛県に渡り、和氣会長から詫びの挨拶で閉会されました。

◀ 後藤雅彦 ▶



その後、懇親会場に移り、高知県の野村先輩の出席も賜り、和気藹々と酒を酌み交わし、親睦を深める事ができました。各県会員には二次会、三次会と転々と店を移り、松山の夜を堪能して頂きました。最後は、野村先輩をホテルの部屋の中まで送り届け、帰路につきました。

**新年 正式参拝・臨時総会
研修会・互礼会報告**

去る一月十七日。午後一時二十分より、愛媛県護國神社に於いて、和氣会長以下七名が新年正式参拝をし、年頭にあたり、感謝の誠と共に國の隆昌と平和を、心静かに鎮まります護國の英靈にお祈り致しました。

午後四時より開催されました「臨時総会」では、二十二名の会員の出席を得て、神宮遙拝・国歌齊唱・敬神生活の綱領唱和・和氣会長挨拶に引き続き、「任期満了に伴う役員改選に関する件」を審議。次期十亜新会長以下役員が発表され、全会一致で承認されました。

次期十亜新会長は、「これまでに培われた諸先輩方の御功績を継承しつつ、神道青年会の更なる発展の為、新役員をはじめ、会員の皆様、諸先輩方と共に新しい息吹を吹き込んでいく所存で

す。」と挨拶されました。

午後五時よりは新年研修会として「今後の青年会の歩む道」と題し、歴代会長座談会が行われました。

昭和四十七年に再発足しました愛媛県神道青年会は、現和氣会長で十一代目。

当日は、二代 十亜興美会長・四代 清家貞宏会長・七代 柳原宰会長・八代 武智正人会長・九代 真鍋豊孝会長・十代三輪田泰生会長が出席され、各在任中の活動の成果と取り巻く当時の状況をお話して頂きました。

非常に当時の貴重なお話を頂く中で、共通して特筆すべきは、
一、神社界に限らず、時局に即時対応出来る力。

一、発想と行動力。

諸先輩方のお話を拝聴しつつ、その力と我々青年神職に寄せる思いを、ひしひしと感じ、暖かく、そして強力にバック



歴代会長10名中6名御参加を頂き歴代会長座談会を開催致しました。 内容は次ページから

アップして戴ける有り難さを感じた研修会でした。研修会終了後、懇親会が催され、神社序副序長 十亜興美様をはじめ十一名の来賓の方々の御臨席を賜り、会員との終始和やかな雰囲気の中で交流・親睦を深められました。

次期三十五周年の節目を迎えるにあたり、会長以下会員一丸となつて諸事精力的に活動していく所存です。全ての皆様の御理解と御協力を御願い申し上げ御報告申し上げます。

◀ 楠部 浩之 ▶

平成十八年度新年研修会

歴代会長座談会

【今後の青年会の歩む道】

和気会長

本年の研修会歴代の会長様と相対しまして座談会ということで只今より始めさせて頂きます。テーマと致しましては「今後の青年会の歩む道」ということで、本日お越し頂きました歴代会長様から、当時の活動状況、また、今後青年会に対しての活動へのご提言等も頂ければと思う訳でございます。本日進行役と致しましてわたくし和気の方が甚だ不慣れではございますが進めさせて頂きます。

【出席歴代会長 紹介 省略】

再発足歴代会長

初代	和田将信	先生
二代目	十亀興美	先生
三代目	長曾我部延昭	先生
四代目	清家貞宏	先生
五代目	矢野哲夫	先生
六代目	池内公和	先生

(出席)

和気会長

御承知の通り本年が再発足三十五周年と言ふ事でご挨拶の中で申し上げさせて頂きましたけども、先ず再発足が昭和四十七年でございます。歴代の若竹の会報を見ますと、先ず発起の準備委員会が有志の八名の参加で昭和四十七年の四月十二日に行われています。同じ年の八月二十七日に伊予鉄会館で発会式を執り行われております。初代の会長様が伊予三島市の和田将信先生でございます。残念ながら他界されております。

それは、早速、本日お越しの歴代会長様の順番によりまして十亀興美先生から再発足当時のご状況等もお伺いさせて頂いたらと思います。宜しくお願ひ致します。

十亀先生

ご紹介頂きました十亀です。宜しくお願ひ致します。今日はお招き頂きまして有り難うございます。新年おめでとうござ

七代目	柳原 宰	先生
八代目	武智正人	先生
九代目	眞鍋豊孝	先生
十代目	三輪田泰生	先生

(出席)

います。昨年も愛媛県神社庁の行政に

対し大変ご尽力を賜りましたこと感謝申し上げます、本年も宜しくお願ひを申し上げます。皆様其々初詣で奉務神社のご奉仕に付きましては誠心誠意を込めてご奉仕されたと心から敬意を表

したいと思います。また新たなる思いを込めてこの新年が素晴らしい年にな

りますように、皆様方のより一層のご精進を心からお祈り申し上げたいと思

います。今、会長からお話がありまし

たように、私共、昭和四十七年にこの神道青年会を再発足致しました。実は

その時に、先輩で和魂神社の三輪田富司さん、また大山祇神社の三島宮司さ

ん、そして椿神社の長曾我部宮司さん等々皆さんと共に情熱を燃やしたので

すが、その時に非常に感動を受けましたのは、長曾我部宮司が當時石鎚神社にわざわざお尋ね下さり門を叩いて頂き、「十亀さん、一緒に神道青年会をやりましょうや」と言つての一言がで

すね、それが電話や手紙だつたらひよ

つとしたら断っていたかも知れないな

と思います時に、門を叩いて頂いたと

いう事は、心が結んだと、結ばせて頂

いたという思いが致します。今もってこれが根幹の感謝であります。これが無かつたら今の私は無かつたかなと思う程、この神道青年会に育てて頂いた、私自身の基本になつていると思つておられます。という事はですね、やはり人と人が如何に交信してお互いが胸襟を開いて対話をして行くか、という事を先ず持つて感じました。今後はですね、神社界におきましてもどんな社会におきましても、人と人の繋がりは「門を叩く」ことによってですね、人の心がそのまま映つて来るなと思っておりました。ご案内の通りその年八月二十七日に発会を致しました。和田将信会長、私の国学院の同級でありますけれども、当時は接觸が無かつたのですけれども、青年会で「おお同級か」という事で一體となつてさせて頂いたという経緯です。私も当時副会長を仰せつかりまして、事務局を担当させて頂きました。まず対象者が百名おいででした。皆様方のお父さんの年齢の方々が殆どだつたと思つております。その百名余りの会員対象者に全員にご案内申し上げま

会員獲得に情熱を注いで参りました。その結果五、六十名の会員の賛同を頂いて、その中で特に活動したのは半分の三十名位でした。根幹に据えました事は先ず会に参加する事であります。総会、新年互に研修会の開催を発起致しました。もう一つはポスターを作りました。当時会長が東京都神道青年会の活動を勉強しておりましてそういうものを愛媛に持ち込んで頂き再発足の時に主導的役割でリーダーシップを取つて頂いた訳です。また、その当時は、神社庁の役員の皆さんと色々ございまして、青年神職の勢いが非常に強かつたものですから、圧力になつたのではないかなどと言う位、神社庁役員の皆さんから反発があつたりしました。しかし青年神職が神社界の為にこれから我々が背負つていく為には若い時にこそ苦労をして礎を築いていかなければならぬという、みんな情熱を持つておりますから、月に一回集まり、出来るだけ充実して会を進めて参りました。私は石鎧神社においても、先輩の皆さんと接觸するのですが、その中に何か物足りないなと思っておりました。けれども、

我神道青年会で同士の皆さんと共に情報の交換をするだけでも、おおいに刺激を受けることが出来ました。それを大きく糧にしまして力になつたと思います。一番大事に致しましたのは、同士を如何にして会に引っ張るかという事でございます。新しい方が入会しましたら、その方を如何にこちらへ参加して頂くように、懇親会では出来るだけその人に話掛けて、やろうじやないかとみんなで盛り上げて、人と人の繋がりをしつかり結んでいかないと人心が離れていくつてしましますので、そうした青年の意気というものを持ちながらやって参りました。そして各奉務神社の実情はそれぞれ差があり御大社は御大社なりに職員を養つて生活の面倒をみていくというのは大変なことなんですね。その運営というのは非常に厳しいものがあります。一社一社で一人宮司や兼職の方がおられますのが、それぞれご苦労して鎮守の森を守つておられる。そんな中で青年神職の気概といふものは変わることが無いという事を前提にして、代償は関係無く青年神職としての使命を抱いてやつしていくとい

う事を必然として推進して参りました。そういった中で星野暢廣先生が担当中心になつて、神社界の実情を把握する為に全神社からアンケートを取りまして、青年会の活動の進め方を如何にするかと。そうした中で、当時、祭の統一が行われ神主不足になつた状況の時に、青年神職が地域で積極的にご奉仕して行こうじゃないかと申し合わせをしておりました。そういう中では「あんたらがそういった事するから祭の統一が行われるのだ」とお叱りを頂いたこともあります。しかし、世の中の全体の流れの中ではやむ得ないものがあつたと思います。発会五周年の時、昭和五十二年に私が会長を拝命致しました。それから全国大会を始めて四国で迎えたのも私の会長の時代でございました。当時は大変な事だったのですけれども会員の皆様のご協力頂きまして全国大会も無事ホテル葛城にて実施することが出来ました。講演講師として全国を行脚して頂きました石井寿夫先生が、我々に熱い情熱を賜りまして、神職の在り方をとくとく語つて頂きました。もう一つは、全国の神

青協発足二十五周年が神宮会館でございまして、その時の感想の中に、「井の中の蛙大海を知らず」ではいけないといました。全国の日本の国民というものはこういうものだと、日本の國を知つておかなければ、地方で活動出来ないのではなくだろうかと。大局を知つて小局に尽くす、また、小局に於いて大局に尽くす。この両方の連携がきちっとして日本の国民の為に如何に我々神社界があるべきか。そして神職はその使命を達成する事が出来るのかと。そういうものを先輩の皆様方から激を飛ばされてその二十五周年の時に、黛敏郎先生に基調講演をして頂きました。その時に「神道青年会の歌」が出来ました。青年神職の意氣を高々と掲げて下さいと、その格調の高い歌を作つて頂きました。また、猿田彦神社の宇治土公貞幹先生、我々の大先輩として激を飛ばして頂きました。「貴方達がする事の尻拭いは、わしらが後の面倒を見る、だからしつかりやりなさい。」という非常に力強い言葉を頂いた時に、全国というの

わたくしもこの神道青年会に参加して活動した事は、今大きな礎になつてゐる事を思いまして、当時の記憶が大分薄れてしまひましたが、要是この國を背負つて、如何に立つて行くか、日本は神々の幸う國日本である、この事が根幹にあるからこそ世界に発信できる國である。それは神道精神が根幹である。ということを自覚して青年神職は更に研鑽を積んで頂いて、日本の國の蘇りが行われますようにがんばつて頂きたいと思います。以上でお許しあります。失礼致しました。

和気会長

有り難うございました。
非常に当時の氣概としては今とは本当に比べ物にならないなど、私が申すのも大変失礼ではございますけれども、当時の状況が解るお話を頂きました。難うございました。

次に四代目会長清家貞宏先生にお願い致します。

清家先生

明けましておめでとうございます。四代目という事でかなり昔の事ですけれども、ちょうど私、大学を卒業しまして

て真直ぐ帰った時にこの青年会はございませんでした。先輩方から一応神道青年会という事でご案内を頂いたのが禊の研修会が一番最初でした。行ってみたら二、三人しか居なかつた。役員会に行つてみたらそれも二、三人しか居ない。これどうなつているのかなとこんなんで青年会出来るのかなと思つておつた所、先ほど十亀先生がおつしやつたように、長曾我部さんが役場に勤めていた初代和田会長さんが役場に勤めていましたけれども自分の仕事を犠牲にして神道青年会の為に基礎を築いて頂きました。その枠の中に私もはめて頂きました。その枠の中には事務局をさせて頂きまして、十亀会長の時には事務局をさせて頂きました。全国大会も県内の神職の協力を頂きましたして盛大な会をホテル葛城で行われましたことを遅先日のよううに思い出せます。それから長曾我部会長さんが会長の時に私が副会長という事でその次に、私と一宮神社の矢野哲夫さんは二十二年生まれの同級生でしたので私が先に会長をさせて頂きました。その時に四国ブロック理事と全国指名理事とがありましたけれども、地区理事をさせて頂きまして、その時

に全国の理事もさせて頂きました。全国の会長が、石清水の田中恆清さん、今の副総長さんです。十ブロックありますブロックの大会には理事全部出て来いという事で、北海道から九州までそれぞれのブロック研修会に会長共々行きまして、それぞれの青年会の方々と触れ合う事が出来ました事は今考えてみると大いに役立つていています。一期二年でしたけれど、その間に四国はひとつという事で四国のブロックを纏めることに専念致しました。徳島に門家君がおりましてその青年会が遺骨收拾団を結成して毎年やつております。四国ブロックみんなで慰靈祭に行こうと言う事になりまして、ゲアム、サイパンに四国の青年会のメンバーで行つて來ました。私が斎主をさせて頂き、池内会長が舞を舞つたり、遺骨收拾までは出来ませんでしたけれど、現地の方々と仲良く懇親を深めることが出来ました。それから四、五年続いたようです。それともうひとつ、私も雅楽をやっておりましたが、椿神社で第一回の観月神樂を始めました。その頃宮司の舞をみんなで勉強してそれぞれのお社で舞が出来るようにしましたし、

当時それぞれのお社に巫女がおりましたので、浦安の舞とか、拙い中でも若い青年神職で、越天楽、五常楽、二曲ぐらいしか出来ませんでした。それから平調の域からまだ抜けていないなど実感として寂しいですけれども、若い方々にこれから雅楽も、また、十亀先生もおつしやられました講演講師の事とか、神社、神道、鎮守の森を如何に守つていくかという事が何であるかという事を青年会の活動を通じて自分で確かな物にして頂きたいと思います。最後に私達がやつて來た事は当然ながら引き継いで頂き、若い方には新しさをもつて一つずつ前進して頂けたらと思います。簡単でございますが経験の中で思い付いた事を話しました。有難うございました。

和気会長

有難うございました。

清家先生のお話の中にもございましたけど、観月神樂も今尚続いておる状態でございます。連綿と続く行事というものはほんとに今でも有益な活動として残つてゐる訳でござります。有難うございました。次に七代目の会長柳原宰

先生にご意見等頂ければと思います。
宜しくお願ひ致します。

柳原先生

おめでとうございます。

柳原でございます。十亀先輩、清家先輩のお話にもございましたが、大学卒業してこちらに帰りましたのでその時の青年会の会長が長曾我部先生の時でございましていきなり事務局をやれということで、それからずっと青年会に関らして頂きました。私（わたくし）の時は昭和天皇の御不例から崩御されまして、その後、今上陛下の即位の践祚大嘗祭がございまして丁度そういう時代の会長でございました。それから青年会の再発足二十周年の記念事業の年でもありましたので非常に忙しい時期というか、色々な時代の変化の中で多くの事を学ばせて頂きましたし、神社本庁ともですね、色々と、会長になる前ですけれども、その当時四国地区の理事をしておりましたから、昭和天様の御不例の時に、もしもの事が在つたらどうするのかと、我々青年協議会としてそういう対処をしなくてはいけないと言う事を言つておつた訳です

けれども、本庁の方がもしもの事は考へないでくれと、恐れ多い事だから考えなくていい。じゃもしもの時にはどうするのだと、ま、そういう喧々轟々のですね、その時、末安さんという今沖縄の神社庁長さんが庶務の担当しておりましてずいぶん青年協議会として議論したことを覚えておりますけれども、そういう時代に会長をさせて頂きました。大きな流れとしましては、十亀先輩が言われましたように最初の青年会というのは神社庁に対して、神社界はこういうところが遅れているんではないかとか、或いはこういったことやればいいんじゃないかとか、どちらかというと喧嘩をするような感じの存在でございまして、神社庁の理事さんも少し煙たがつていた、そういう時代でございました。私はそういう提言は大事だけれども、兎に角神社界の役に立つ事をやらないと認められないのではないかという事で今言われたような観月神楽、これもそれぞれ県内を回つて神道というものを皆さんに理解して頂こうとソフト面でやろうじゃないかという事になりましだし、今も続いております「初詣は氏神様から」とこのポスターも十亀さん

長曾我部さんから続いていると思うのですが、私の時は今は無くなりました。が、ラジオやテレビスポーツも組んだりしたり、観月神楽も南海放送サンパークで、大勢の人を見て貰おうと言う事でやったこともあります。これはなかなかチケット販売までして下さいまして難しい面がございまして長続きしませんでしたけど。ま、そんなことを行つた記憶がございます。青年会といいますと、大きく分けて内部の中自分自身を高めて行く研鑽していく部分と、青年会の組織として神社界に対してもう一つ行動を取るべきかという二つ問題が在るかと思います。皆さんそれぞれの立場で青年会に参加だと思いますけど、人間というのは自分の尺度でしか物事を判断できません。従いまして同じものを見てもですね、その尺度の違いによりまして非常に勉強になる人もいれば、猫に小判のような感じの人もいる。そういう意味では自分の尺度を高めて行く、見識と置き換えるもいいですけれど、見識を高めて行く、それは青年会の中で切磋琢磨することによつて培われていくのでは

ないかと思います。それからもう一つは組織として活動していく以上、それを構成する会員のレベルですね、レベル以上の活動というのは出来ない訳で、そういう意味で会員同士のレベルを上げていき、レベルが上がればその活動自体も自然と向上した活動が出来ると、そういうことでやつて参りました。十分なことは出来ませんでしたけども、お蔭様で神社庁の方も非常に好意的に対応して頂きまして、寄付の方もですね、それまで一生懸命皆さんが神社まで行つて集めて廻っていたのですが、直接出向かなくても、段々と振込みとかで、自然と寄付金が入つて来る様になつた、そういう時代ではなかつたかなと思います。あと青年会の事で言いたい事がござりますがその後で何かあると思ひますので、私の言いたいことは以上にさせて頂きます。青年会の方々、我々とは時代が違いますので色々時代の流れの中で悩むことが在ろうと思ひますけれども、ただ、今神社の評議委員にも一人は入れるようになりましたし、府長さん、副府長さんも青年会の会長を経験しているという

ことで昔の時代とは全然違う、非常に好意的な、青年会に取りまして良い時代でございますので、是非、その辺りを含めてですね、もう少し積極的に神社庁にアピールしてもいいのではないかと思います。以上でございます。

和気会長

有難うございました。

私事ながら柳原さんが会長の時代に私も会の方に参画させて頂きました。大嘗祭のパレードもロープーウエイ街の入り口から大街道から銀天街を行きまして今のが島屋の前で終了という事であったのは昨日のように覚えております。またその際にも、柳原さんが街宣活動の際に、変わつた人がおりますので、色々絡まれた事がありまして、それをなだめてすかしてと、これを言うと怒られるのですが、柳原さんもなかなか若かった頃でござりますので、割つて入るのに苦労したのが記憶に新しい所でございます。有難うございました。続きまして八代目の会長武智正人様にお願い申し上げます。

武智先生
おめでとうございます。

先輩方のお話を伺つておりますと、新規

事業とか、新しい方向性とかそういうことをどんどんされておられて、伺つておりまして段々恥ずかしくなつてまいりました。本音で申し上げますと私が会長になつた時に神青が良く解らなかつたと言うか事務局を経験せず、副会長そして会長という形になります。思い出話を話させていただきますと、会長の柳原さんから次の会長をおまえやれと、ようしません、やれと、やれ、やれ、いう風に言われて、はあ、と思わずはあ、まで言つてしまつて会長にさせて頂いた次第です。直後に東京の神社本庁で他の県の方と一緒にになりました、柳原さんはどうしてやめたの、柳原さんはもう出て来んの、柳原さんはどうして、とこう声掛けられ、最後に、あんたかーと言われまして、愛媛は人材不足だなーと、目の前五十センチ位で言われたんですね。なんでも東京くんだりまで来てこんなこと言われるんだろうと、肩を落して帰りました、三十一歳でした。実際に柳原さんのリーダーシップが強烈でして副会長になつた時もゲイゲイ引っ張られておりましたことを良く覚えております。そ

の後、柳原さんの流儀なのでしょうが、代が変わつたらスパート、一切接触が無いというのは言い過ぎですが、質問すれば答えてくれる、というパターンを守り抜いて頂きました。半年間はしょっちゅう電話しております。どうしようどうしよう、ホント出来るのだろうか、俺どうしよう、とそんな事ばかり考えておりました。率直な話申し上げまして神青の予算が二百五十万でした。内百二十万が繰越金でした。百三十万動いてるんだなど、もし出来ないのであれば百三十万、個人の財形と定期と郵便局崩して、ごめんなさいって言つてしまおうと、ほんとそこまで思いました。その後副会長さん事務局さん理事のメンバーを決めて動き出しましたが本当にどぎまぎしながらの四年間、平成五、六、七、八の四年間でした。本当にどうしよう、日々が実は続いておりました。新しい事業とか、こうしようああしようあれましたい、という前向きな事は本当に思い付けてなくて今までの事を兎に角クリアしようとそんな事を考えておりました。その中でいろんな方にいろんな事をお

願いしましたが、一度として、「NO」と、言われたことがなかつた。四年間一回も有りませんでした。これだけは本当に有難いなと思います。当時の事務局さん副会長さんメンバー全員良く覚えております。そしてお前やれ、わしら応援してやると、はつきり言つて頂いてその言を翻した人は誰もいなかつた。本当にそれは有難く嬉しい事だと思いました。さあ、どういう風に進めようか。神道青年会、僕は新しいことを思い付く能力はそうはない、兎も角今ある事を先輩がされてきたことを続けていくことを先ず考えよう。そうしたら、何が大事なのだろうか。いや、神青は親睦半分仕事半分、そう自分に言い聞かせました。神青でご飯食べて、いる訳じゃないから神青に出られない人は出なくていいです、出て来れる人は可能な時だけ出て下さいと、そういう言ひ方をずっと通してきました。序役員の方おいでますので申し上げにくいのですけど、当時三十一歳でした、神社庁に我々神職は守られているわけです。そして三十一にあと三十年四十年足したら六十一歳七十一年になる。その時に我々は神社庁に守られながら同時に神社庁を支えて

いくのだと。で、我々愛媛の神職の数は、そう増えることも無ければ、ぐつと減ることも無かるうと。じゃ今いるメンバーでたぶん皆さん、二十年三十年後もたぶん顔を合わしてると思うんですよ。若干体形は変わつてきますけど。同じメンバーで二〇年三〇年四〇年も、そしてその時は神社庁に守られながらも我々が支えるんだと。だつたらその時に仲良くなつてもそれは結構な話だけど、今の内から仲良くなろうと、そういう気持ちを持つて親睦半分仕事半分だと、だから神青の出席者が少なくてもそれだけは絶対怒つてはならん、文句言つてはならんと自分の頭の中で言い続けてやつて参りました。新規の事業と、いうのではなく、ちょうど四国四県の地区協の発足がありまして愛媛が担当せよと、この時には大雑把なプランしか立てなかつたにも拘らず、副会長が事務局がどんどんどんどん進め頂いた。また、徳島の会長も凄く応援して頂いた。その時に申し上げたのが、発足の式典は大体六十人の参加でしようと、内十名は御来賓です。残り五十名の半分を愛媛県で占めたい。数

は力だと。そうしましたら愛媛の方がたくさん来てくれた。理事みんなのお誘いの電話攻勢、みんなが声掛け合つて、ひとりでも多く来て欲しい、懇親会だけでもいいから来てくれとお願ひを重ねたところ、本当に多くの方々のご協力を頂いたのを良く覚えております。阪神淡路大震災、今日一月十七日で十二年目ですが、その復興活動と、神青協の方から指示が出て四国四県で淡路島に向いました。愛媛からの参加者が一番多かったというのに、今でも本当に嬉しい記憶として残っております。新しく興した事もありませんでしたが、しかし兎も角、副会長と会長、事務局が出れる日に役員会をしようと情報の共有化は必ず行おう、僕が知つてる事は副会長さんが知つてるようになよう。FAXしか無かつたものですから、メールなんてありませんでしたから、FAXFAXと流していた事を覚えております。四年間大きなことはしておりませんが、しかし、お願ひをしてN〇と言われたことはただの一度も無かつた。ご協力を頂いてことに本当に感謝致しております。思い出話で

ございます。以上です。また青年会に望みますことは、やはり、お互い情報を共有して言いたい事を言える会、であつてほしい。四十を越えるとなかなか難しい、言いたい事が言えなくなる年代のかなだと思います。しかし我々がおそらく神職である以上、三十年経つても同じメンバーが同じ年代でご一緒に顔を合わせます。ご一緒に歩いて頂けたらと思います。有難うございました。

和氣会長

有難うございました。

お話の中にも御座いましたけれども、本日一月十七日は丁度、阪神淡路大震災の十二年目という事でございます。当時武智さんの思い出としまして災害復旧という事で淡路島へ、徳島の鳴門にござります大麻比古神社さんの方に、社務所に三泊程させて頂き、毎朝、淡路島に渡つて特にお社のみの復興という事で、倒壊したお社の撤去等を四国地区から参加した事は記憶に新しい所です。有難うございました。次に九代目の会長でございます。眞鍋豊孝先生にお願い申し上げます。

失礼致します。会員への提言については

OBになつてからお話をしたいと思いま
す。私からは愛媛神青入会当時から今
日までのお話をさせて頂きます。平成
二年に伊豫豆比古命神社に奉職、同時
に愛媛神青に入会させて頂いたのです
が現会員で言いますと和気会長が同期
ぐらいかと思います。隣の席に座つて
いらっしゃる柳原先輩が当時会長で翌
年には神青協中央研修会が四国地区主
管、香川県が担当で開催されました。
私は平成三年から理事を一期、平成五
年から二期副会長、その内の一期は武
智先輩が会長であり事務局をお預かり
させて頂きました。平成九年には三十
二歳という若輩者でございましたが武
智先輩の後を引き継いで会長の大役を
お受けすることになりました。武智先
輩は会長退任後、神青協役員に就任さ
れ中央へ出向なさつていて愛媛神青の
相談役というお立場で役員の中に残つ
て頂き是非ともご指導ご助言をと再三
再四依頼した事を覚えております。で
すが武智先輩は一刀両断に断られまし
た。と言いますのも「前会長が役員会
に残ると目の上のたんこぶになる
から・・・、会長（眞鍋）が一番迷惑

と思うし、おまえが好きなようにやれ」という風な一言が今でも印象に残っています。その当時の県内の状況を申しますと神社庁舎建設委員会等に参加させて頂いたり神社庁の引越しなどの奉仕などもございました。また平成十年頃だったでしょうか、愛媛玉串料訴訟に関する情宣活動を青年神職の若さゆえ、お許し頂いて大街道や銀天街をハンドマイクで叫んだことを思い出されます。またそのビラを県内本務官司様宛に送付させて頂き所謂愛媛県でなんとかその玉串料訴訟の問題に一般の方々に少しでも御理解を頂きたいといふ願いをもつて行動したことを記憶しております。話が変わりますが実は、私の前に是非ともこの方に会長をお受け頂きたい方がいらっしゃいました。本日ご出席頂いております三島神社の吉田充邦先輩でございます。非常に残念乍ら諸事情により会長をお受け頂けなかつたということがございました。しかし乍若輩者の私を事務局長として引つ張つて頂き二期四年に亘り活動が出来ましたのも吉田先輩のお陰だと思ってるところです。

遡りますが愛媛神青再発足二十周年の活動事業について先程柳原先輩からお話をございましたが、その時期を会員として経験させて頂きましたが、それから十年、再発足三十周年に向けて記念事業の準備をする時期に当たつた訳でございます。その中におきましては「愛媛の神葬祭」という私の中ではその冊子の完成を当时愛媛神青会員で何かを残した物の一つにならうかというところで、各会員の絶大なる力を得まして無事発刊の運びになつたという事が私の記憶の中に深く残っております。また何か新しいものという事を考えました時に先程、清家先輩から観月神樂をされたというお話をございましたが、神社での開催以外、氏子崇敬者の皆様以外に是非とも雅楽を聴いて頂きたいということで現在も続いておりますが、慰問神樂始めました。平成十一年に堀先輩にお話をさせて頂き、さくら幼稚園で開催させていただきました。その翌年、更に続けることが意義深いものと思い、なかなかお話をさせて頂く機会が無いところに、たまたま柳原先輩にお願いしたところ当時中学校のPTA会長をなさつておられたという事もございまして付属中

学校で神樂を奉納させて頂いたことを思い出されます。私も中では慰問神樂をもちろん続けていくことは大切な事だと思います。その後幼稚園または老人ホーム等で現在続けて頂いておりますので引き続き是非とも継続して頂きたい事業の一つでもございます。また武智さんからお話をございましたが、会費の件についてでございますが、当時は繰越金が無ければ実際のところ会の運営ができないわけですが、ございまして、総会の会費、当時は懇親会費にして、総会の会費に充当させて頂いておりましたが、年会費と言つものが総会の当日に支払われていく、それが所謂懇親会に当てられていた訳ですけれども、総会の会費と年会費を別にしたのもこの時期だつたと思われます。少しほは運営について若干ではございますがスムーズに動き出したという風に思つております。ですけれども、決してその、本来は自分が出したお金で持つて研修する、という気持ちを是非とも今後ともお忘れ無き用にして頂きたい、所謂、寄付を頂いている方の善意をですね十二分に気持ちの中に留めて、日々研鑽を続け

て頂きたいという風なところでござります。纏りの無い話となりましたけども、若干その当時の会の中の様子をお話させて頂きまして終わりにさせて頂きたいと思います。

有難うございました。

和気会長

有難うございました。

私と眞鍋さんは椿祭の際にお会いしたのが初めてということで、そのころからご一緒させて頂いておる訳でもございます。誠に有難うございました。続きまして最後でございます。前会長三輪田泰生先生宜しくお願ひ申し上げます。

三輪田先生

失礼致します。最後に一番若輩者の十代目という事で仰せつかりましたが、私（わたくし）まだ現役でございましたが、私が会長で在った十三年、十四年一期、会長を拝命した訳でござりますけれど、その当時お手伝い頂いた会員の皆さんにはかなり居られると思いますので詳しい説明はやめようと思つてゐるんですが、暫くお付き合い頂きたいと存

じます。私が会長になつたと言うのが晴天の霹靂といいますか、実際、私は一般会員から愛媛県神道青年会、いきなり会長にという事になつてしましました。一般会員という事で活動しておりましたが、その時に前眞鍋会長からご指名を受けまして全国の方の事業委員を一期二年間務めさせて頂いたのですが、愛媛県の青年会の方では一般会員という事で活動させて頂いておりました。それで眞鍋会長の二期が終わる時に、実は私、内々では副会長をという事でお話頂いておりましたが、当時の会長になられる方の諸事情によりまして、総会の三日前にいろいろお話を頂きまして、何とかやつてくれないかと言う話で、やるというか、受けることにしてしまいました。本当のことと言ふと、本当はその時は受けたくはありますでした。何故かといいますと、皆さんが存知だと思いますが、中央研修会という全国の大会を愛媛県が担当という事で行なうことが決まつておりましたし、再発足三十周年、それもその時代に行なうことが決定しておりました。しかも一般会員から会長というその重責を担うこと、私には自信がありませんでしたし、役員

経験をして会長になることが一番である、ということは他の方にもお酒の席とかで言つてはおりましたけども、それがかなりのプレッシャーになつておりまして、最初の就任の挨拶などは何を言つていいか、三日間であまり思つかない。でも受けて総会に於きました。ご承認頂いた後はですね、やるしかないという事で、その事に邁進致しました。私の時代は中央研修会と再発足の三十周年、前会長の眞鍋会長から受け継いだことをどうクリアするかという事、その一点に尽きておりました。中央研修会におきましては松山全日空ホテルで四百名以上の全国の会員の方々をお招きしまして、成功裏に修めました。その時も、清家先輩でしたかね、先程おつしやいました、四国は一つと、いうような命題を持ちまして四国地区の協議会と共におもてなしの心を持つて、全国の会員の方々をおもてなしをして、講演を聴いて頂き、席を持つて、二次会をご案内するという四国のおもてなしの心を全国の方々に十分分つて貢えたと、いう風に思つております。

四国の松山であつた中央研修会は良か

つたと、今でもいろんな人にお聞き致します。中央研修会に於きましては、次期会長に決まつております十亀君と、たまに話すのですが、また五年後位には四国地区が担当になる中央研修会が来ようかと思つております。その時はですね、前もつて五年先を見据えた活動をしていかないと駄目なんじやないかと、僕は思つております。私の会長時代に、前眞鍋会長から受け継ぎまして、県の青年会の予算を削つてその中央研修会、三十周年という大きな目標に向けて財政を削り貯蓄をしながらやつた訳でございますが、また県内の会社の宮司様方にもお願ひ致しまして大きな大会に向けてのご寄付もお願いをした訳ではござりますけれども、こういうご時勢でござりますので寄付ばかりに頼つておられません。これから先未来に向けてですね、五年後、またその次もあるかもしれません。そういう長い方向性をもつて、青年会によつて事業品の頒布を行い、それをそのような形の大会に向けて貯めていつたりとかですね、そういうお考えをして頂きたいと思っておりますし、そうしな

くちやいけない時代が来るんじやないかなど。神社界が無くなるとは全然思つておりませんけれども。その中央研修会と言つたのが続く限りは四国地区には十年に一度やつて参ります。本来は四十年に一回でいいはずなのですけれども、十亀先生の折に全国大会をやられたと聞いておりましたので、愛媛は担当しないと思つておりましたが、収容できるホテルが他県には無い、前回は香川県がやつておつたと、徳島高知は出来ないという事で愛媛県が受けるということになつております。もしかしたら次の五年後も愛媛県という話もあるかもしれません。愛媛県と決まつてから活動したのでは遅いと思います。四国が受けると言うことを前提で活動された方がいろんな面に於きましたよろしいのではないかと思つております。また、中央研修会のあと三十周年でございますが、眞鍋前会長の折に準備委員会ということで色々ご尽力されてそれを引き継ぎ「愛媛の神葬祭」、素晴らしい神葬祭の本を準備委員会の方で作つて頂きまして、私の折に神道青年全国協議会の方で授与品全国最優秀事業賞も頂きました。内容におきましては、今までのア

ンケート等を載せただけではなく神青会からの提言、変わつた形での提言が評価されたと聞いております。私はですね本当、二年間、大きな目標をクリアすることだけに邁進した二年間で、それが終わつた後は皆さんに、「少し休もう」と、思わず本音を漏らしてしまいました。やらなくちやいけないことは本当やらなくてはいけないですけれども、これ以上新しいことをする予算も無ければ、充電の時期だと、三十五周年が終わつた後は充電の時期でございました。三十周年も全国大会の為、予算の関係上小さく県内だけのご来賓をお呼びしてと、その様な形にさせて頂きました。本来ならば全国関係団体にご案内申し上げまして、盛大裏にやるべきでございますが、予算の都合上小さく愛媛県内だけで式典という形にさせて頂きました。今年は三十五周年を迎えるということで、五周年ごとの方なので盛大にやるのかやらないのかその時の会長さんのお考えでございますが、それに向つて邁進して頂きたいと思つています。私はまだ会員でございます、提言といいますか、皆さんと

一緒に二年間は努力して行きたいと思っております。相談役という立場も頂く様でございますので、解らない事があれば何でも聞いていただき、私の経験した事であれば何でもお教えしたいと思つておりますので、これからも宜しくお願ひを申し上げたいと思います。失礼致しました。

和気会長

有難うございました。

ちょうど三輪田前会長さんのご就任の際も、お話しの中にありましたように大変嬉しい中でご就任いただいたので、また尚且つ全国大会という事で、大変な重責であつたろうと思います。

お時間の方大分迫つておりますけれども、一時間の中で話しきれるものではございません。しかしながら折角の機会でございますので、できれば、今後の青年会に対しましてのご提言、またほかにも当時青年会の会長様をお勤め頂いた中で諸先輩の神職さん方にこういうことを聞いたと、記憶に残る一言でもあればお聞かせ下さい。順番でなく述べます。もしよろしければご教でございます。もしよろしければご教

一緒に二年間は努力して行きたいと思っております。相談役という立場も頂く様でございますので、解らない事があれば何でも聞いていただき、私の経験した事であれば何でもお教えしたいと思つておりますので、これからも宜しくお願ひを申し上げたいと思います。失礼致しました。

授頂ければと思いますので宜しくお願ひ致します。

十亀先生

御承知のように人心荒廃がどんどん進んでおりまして、教育再生の問題、家庭再生の問題、等々ございます。日本の国を揺るがすような重要な問題が今提起されています。その中で特にですね、これから神社界が取り組んでいかなければならぬ事の根幹には、皇室の問題がございます。皇室の皇位継承の問題はおそらく女系天皇と長子優先という問題が実現致しますとこれは大変なことになります。

実は昨年、皇室典範に関する有識者会議の答申が出されました。その時に全国の神社界が一体となつてそれは拙速であるということで、昨年の一月十九日に憲政記念館に全国からまさに八百名位の神主が集まり、皆神様のご神威を体して八百万神がその時、憲政記念館に集まつたと私は思いました。その後国会で皇室典範が審議されようとした二月の六日、小泉首相が提案しようとした時に耳打ちがあつて秋篠宮妃殿下のご懷妊と、いうことでびたつと止まつた、しかも親王が当然

生まれるような雰囲気がございまして九月の六日にご誕生と、まさに神がかり的な状況が生まれました。実は皇室典範のことで国会議員の皆さんに陳情に参つた時に国会議員の先生方から日本神道が日本の国の精神文化を構成している、だけど私たちはあまり日本神道の精神というのをまだ勉強していない、だから是非そういう機会を頂きたいです、というお話を聞きましたことと共に、国会議員の先生方は、今の時代、進化している中で、代えなければならぬ事と、代えではならない事の両極はある。代えてはならないものは何かという、この日本の国のかつて伝統といふものを我々神主が代議士の皆さん方に伝えていかなければならない。更には各県の教育委員会におきましても学校教育の現場に教育基本法が改正されましたけど、政教分離ではなく、祭政一致の心で無いとおそらくこの国の蘇りは無いと思います時に、教育委員会の方々との話し合いの中で、神道精神を理解して頂くとか、勉強して頂くことが大切と思いました。だけどその前に我々が果たして本当にこの神社神道

の精神を説明して理解していただける勉強をしているのかとということをひしむ感じがするわけであります。そうしたことを思い出しました時に、昨年の在り様は、戦後の憲法下でありました日本の国を基に戻して原点に帰る。という事は皇室、女系天皇また長子優先が優先させましたら、皇室の消滅に繋がっていく。皇室が無くなると伊勢の神宮は皇室の祖神をお祭りしていますから神宮が危ない。神宮が危なくなつたら鎮守の森が危なくなる。そうすると日本のは今迄の日本の国ではなくつてくる。もう一つの大切なことは、三大神勅の中に稻穂の神勅によって米の種を以て、この国の主食にしなさいと稲魂をもつて万世一系の中に連綿として今日まで伝わってきた。米だから今日まで伝わった、これが麦とか他の種だったら伝統は消滅している。そういうことになるんだなど、今回の皇室典範の問題でひしひしと感じさせられました。皇室が変わったら我々の家庭もみんな変わってくる。それではやっぱり日本のお國のお國柄ということが世界に発信出来ないという想いが致しま

す。是非ですね神道精神を皆様方が私達もそうですが、しっかりと把握して自分達を確立して発信を如何にするか、大きな問題かなと思います。他人事ではないよと、あつと驚く間に法律が変わってくる、世の中の動きがどんどん変化して変わつてくるそういうことを思います時に、是非そういふた勉強を進めて、そして世の中を神道精神をもつて導いて頂きたいなど、その願いでいっぱいあります。お手元の資料は、産経新聞の正論ですが、産経新聞には非常に素晴らしい内容のものがございます。石原都知事も月に一回書かれます。それからもう一つ、神社新報を読んで頂きたいと思います。山谷えり子さんが教育審議会の再生会議の首相補佐官をされておりますけど、この方が書かれているものは他にも沢山ございますが、この文を読んで頂き、学校の現場が如何になつておるかという、ぎょっとするような事が出て参っております。神社新報を是非読んで頂きたい。そして産経新聞も読んで頂きたい。そういう原稿を読みながらですね、他人事ではない我が国があらぬ方向に変つてしまつたと思つた時にはもう遅いかなと思いが致しますので

柳原先生

今、十亀副庁長が言われましたのは、所謂、不易と流行と良く言われます。変わる世の中の中で変わらない部分、そういう部分、特に神社は伝統秩序を大事にする所でございます。そういう所の基本を勉強しなさい、また我々が自覚しなくてはならない、というお話をだつたと思います。それとは別にですね、流行の部分で今本当に時代が変わっております。先般新聞に、国会議員が議会中にメールをしていて、本当はメールなんかしちゃいけないんですけど、殆どの議員がメールでやり取

和氣会長

有難うございます。
では、時間の都合がございますが、最後に私がお付き合いさせて頂きました先輩を代表いたしまして柳原先生なにかござりますでしょうか。

りをしてるつていう記事が載つてしまふけど、今やそういうマナーが非常に乱れております。神社本庁が年末にインターネットのパーティ参拝という事でメッセージを出しておりましたけど、本庁のどなただつたか、名前は忘れましたが、ネット上に神は存在しない、なんていう訳の解らん事を言つております。たけれども、ああいう発言自体、インターネットの事が全然解つていなといと思ひます。青年の皆様方は、私以上にそういうインターネットについてもいろいろと使われていますし、理解は深いと思ひますので、これからそういう流行の部分と伝統の部分をどう調和していくのか、青年会としてどういう風に捉えていくのかという非常に大きな問題を控えていると思ひます。今や時代の速さに宗教界の方が追いつかない、宗教界の方が対応を迫られて、そういう最先端、流行の部分と、今十亀先生がおつしやいました變えてはいけない不易の部分と、そういう所を考えながら活動して頂けたらなと思つております。以上でございます。

和気会長

有難うございました。

それぞれ貴重なご意見様々頂いた訳でござります。しかしながら若干お時間が過ぎておりますので残念ながらここらで一度閉めさせていただきます。この後懇親会もござりますので、それぞれお酒を酌み交わして頂きましてご意見等もお伺い頂けたらと思います。会におきましては

自分の会の歴史を知るということは、本來あるべき姿だと思ひますし、その中で、本日のご意見等は大変ご参考になつたのではないかと思ひます。本日大変お忙しい中、歴代会長様ご臨席頂きましたこと、またご教授頂きました事、この場をお借り致しましてお礼申し上げます。本日は

金壱萬伍阡圓也 廣田神社 武智盛明 様
三島神社 能田 誠一 様
「能」の字を誤って記載してしまいました。三名の宮司様には大変ご迷惑をお掛け致しまして誠に申し訳ございませんでした。今後同じ間違いをしないよう十分注意し編集して参りますので、お許し頂きまして、当会に對しまして変わらぬご支援ご協力を賜りまます様お願い申し上げます。編集者一宮利史

【訂正とお詫び】『会報「若竹」』第四十六号（平成十八年六月一日発行）の平成十七年度寄付助成ご芳名の中、十三ページ中段の金伍阡圓也

船越和氣比売神社 重松長英 様
金壱萬伍阡圓也 廣田神社 武智盛明 様
三島神社 能田 誠一 様

【編集後記】一昨年の秋篠宮家、悠仁親王殿下ご誕生の慶賀に際しまして、健やかな成長と皇室の益々の御栄をお祈り申し上げます。
さて、歴代会長談話のお話の中にも出て参りました、この歴史ある会報誌「若竹」を二年間計四号分の編集をさせて頂きました。慣れない作業の為、編集段階での不手際が多くあり多くの方にご迷惑をお掛けした次第です。お詫び申し上げます。また、原稿の依頼を快くお引き受け頂きました皆様、その他諸々ご協力頂きました皆様誠に有難うございました。この二年間貴重な経験、勉強をさせて頂きました事、感謝申し上げます。有難うございました。

（終）
『一宮利史』

ご臨席頂きました六名の歴代会長様には青年会の歴史から今後の指針なるお話を頂き誠に有難うございました。新年研修会に出席出来なかつた会員の皆様にも貴重なお話を是非聴んで頂きたく音声から起稿させて頂きました。